

## 食べ潰される革命の遺産——ホルン・ハンガリー元首相の死に寄せて

秋山 晋吾

(一橋大学大学院社会学研究科准教授)

6月19日、ハンガリーの元首相ホルン・ジュラ氏\*が80歳で死去した。最近数年間は病気のために表舞台からは退いていたため、彼がハンガリーのメディアで話題の中心となったのは2007年以来だろう。その時のニュースは、当時の社会党ジュルチャーニ政権が提案したホルン氏への勲章授与が、当時のショーク大統領によって拒否されたというものだった。その一件からも透けて見えるように、ホルン氏はハンガリーの現代史の矛盾を体現した人物のひとりだった。

ホルン氏は、戦後確立した社会主義体制下の1954年に勤労者党(1948年に共産党が合併改名)に入党、1956年10-11月のハンガリー革命(社会主義体制に反対する市民蜂起がソ連軍によって鎮圧された事件)では、社会主義労働者党(同年10月に勤労者党が改組・改名)の革命派弾圧の実働部隊で活動した。その後、外務官僚としてのキャリアを経て、1980年代から党内の改革派グループで頭角を現し、1989-90年には社会主義体制最後の内閣で外相をつとめた。1994年には、体制転換後の2度目の総選挙で社会党(1989年に社会主義労働者党が改組・改名)を率いて大勝し、1998年までの4年間、首相を務めた。

世界にその名を知られるようになったのは、1989年6月に、オーストリアとの国境に設置されていた鉄条網をオーストリアの外相とともに切断して、「鉄のカーテン」の終焉を印象付けた時だった。その後、ハンガリーに避難してきた数多くの東ドイツ市民を西ドイツに出国させる決定を主導して、ベルリンの壁崩壊への道を整えたことは、今後も世界で記憶されていくだろう。

しかし、ハンガリーでのホルン氏の評価は極めて両義的である。一方では、国際社会への復帰を主導して冷戦を終焉させ、民主体制下で初めての政権交代を果たしてこの体制を軌道に乗せた立役者として評価されるが、他方では、1956年に革命派弾圧の手先となり、独裁政党でキャリア形成した人物として拒絶されるのである。2007年の叙勲問題は、ホルン氏の民主化への貢献に焦点を当てた政府と、革命弾圧者としてのホルン氏を問題視した大統領の間の見解の相違であった。つまり、その時に対立軸となったのは、1956年と1989年というハンガリー現代史のふたつの象徴的な年号のどちらに注目するかということであった。言い換えれば、市民蜂起の鎮圧を非難し、民主化を評価するというスタンス自体は、当時の左派政権と右派の大統領の間に違いは存在しなかった。1989-90年の転換によって確立した体制を護持するという点では、両者は完全に一致していたのである(ハンガリーでは89年10月に憲法改正、90年3月に初の自由選挙が行われたため、体制転換の年は1989-90年の2年間を指す)。

それから6年後の今、対立軸は全く別のところに移動した。現在のハンガリー政治(と社会)は、変革の年を1989-90年とするか、2010年とみなすかをめぐる深刻な対立のなかにある。前回、2010年に行われた総選挙で国会議席の3分の2以上(単独での改憲が可能な議席数)を制する圧勝をした右派フィデスとオルバーン首相は、1989年改正憲法に代わる新しい憲法を制定(2012年1月施行)し、その憲法で国名を「ハンガリー共和国」(89

年に「ハンガリー人民共和国」から改称から「ハンガリー (Magyarország)」に変更したことに象徴されるように、1989-90年体制の正統性を否定することを政治信条の主軸に据えている。つまり、オルバーン首相らによると、共産党の後継政党たる社会党が繰り返し政権に就くことを許した20年間は社会主義体制が残存していたのであり、最終的にこれが清算されたのは、2010年の(フィデスが言うところの)「投票箱革命」によってなのだ、ということになるのである。(その論理では1998-2002年の第1次オルバーン政権も社会主義体制の片棒を担いだことになるのだが。)

国会議席3分の2以上という数を背景としたオルバーン首相の強権的な政権運営は、新憲法制定をはじめ、メディア規制の強化、中央銀行への政府の関与強化、外資金融機関への規制強化と年金の国有化、憲法裁判所の権限縮小など、国内だけでなく国外でも強い懸念を引き起こしている。最近も、欧州委員会や欧州議会で、EU基本条約第7条(加盟国への制裁規定)の適用が言及されるなど、ハンガリーはすっかりヨーロッパの問題児になってしまった。

オルバーン政権の3年間の「改革」が、国内外で指摘されるように民主体制の根幹を揺さぶるものであることは確かだが、EUからの脱退が非現実的である以上(しばしばEU懐疑的発言を繰り返すオルバーン首相だが、EUを完全否定してハンガリーが立ち行くとは全く考えていない)、今後、ヨーロッパの規範をこれ以上大きく逸脱していくことはないだろう(と期待する)。むしろ、深刻な問題なのは、オルバーン氏らが1989-90年体制の評価を大きく転換させることで、2大政党の一翼たる社会党や、90年代、2000年代に社会党と協調してきたリベラル諸勢力との対話の回路を閉ざしてしまったことである。オルバーン首相と与党にとって、野党諸派は単なる「前体制の遺物」なのであり、対話の相手、政権獲得ゲームの正当なライバルではなくなってしまったのである。

6月20日のハンガリー国会は、オルバーン首相も出席した本会議において、前日に死去したホルン元首相に対して黙祷を捧げた。フィデス出身のケヴェール議長は、追悼演説でホルン氏の1989年の功績をたたえた。葬儀は、まだ決まっていないが、おそらく国葬として行われるようだ。ホルン・ジュラという、ハンガリー現代史の光と影を背負った人物の死が、体制の正統性をめぐる見解の相違を超えた対話の糸口となるのだとすれば、これほど皮肉なことはない。しかし、ハンガリーには(そして、多かれ少なかれ旧東欧圏の諸国には)そうした政治対話・社会的対話の回路の再生が不可欠である。

\*ハンガリー人の名前は、姓・名の順。